

はじめに

この本は、1990年代に、おもに英文法を題材として対談したものをまとめたものである。不遜な言い方に聞こえるかもしれないが、いま読み返してみても、まったく古びていないように思われる。

2000年以降、英語公用語論、小学校教育への英語導入、英語社内公用語化など、会話を重視せよという掛け声は大きくなるばかりだ。

くわえて、電子情報化のすさまじい勢いである。紙の辞書の需要は減るいっぽうで、英和・和英・英英の辞書が収録された手軽な電子手帳がそれにとって代わった。これにより発音も記号ではなく音声で確認できるようになった。

また、インターネットに接続すれば、英米のニュース番組を読むことも聴くこともできる。無数の動画も利用できる。時と場所を選ばず対面コミュニケーションがとれる。趣味にせよ、必要に迫られてにせよ、その気になれば、即座にいくらでも英語学習に活用できる素材と手段が手に入るようになったというわけだ。世界規模で英語情報を隔てる障壁がなくなり、世界が平らである(The world is flat.) ことが再発見されたというわけである。

これに伴い、英語を使わざるをえなくなった非母語話者の数は膨大な数にのぼった。結果、それぞれ異なる文化、伝統、宗教、風土など背負った大勢の人間に影響されて、じつに多様な英語が流通するようになった。

こうした事情を考えると今後、文法は単純化するのではないかと思われる。英米の標準英語とは別の「世界標準英語文法」ができてきあがるかもしれない。

現在、我が日本では、文法の人気は凋落の一途をたどっている。

文法教育は「過去の遺物」のような扱いを受けている。が、言うまでもなく、会話だろうと読解だろうと作文だろうと、最低限の基本文法を抜きにしては成り立たない。文法が消滅することはありえないのである。なぜというに、文法がなければ、きちんとコミュニケーションをとることはできないからだ。

いずれにせよ、本書にいまなお注目してくれる人がいるということは、わたしたちの文法に対する見方、扱い方が本質的かつ原理的だったからだろうと思われる。

生来、口の重い私がここまでしゃべれたのは、ひとえに対談相手である里中氏の力量である。多謝。

2012年2月

新津信治